

青年期における孤独感とふれあい恐怖的心性・

自己愛傾向との関係について

永井しおり

(久保克彦ゼミ)

序論

青年期、特に大学生における代表的な感情や行動原因に孤独感があると言われている。高校生までは、多くの人間が親元で生活をしている。しかし、大学生ともなると、親元を離れて生活をする人も多くなる。そしてひとりで受講し、単位を取得していくというこれまでの学校生活では体験してこなかった大学という特殊な環境に一人で立ち向かって行かなければならない。そして、多くの人が就職活動を行う。そのようなこれまでの生活環境とは異なり、親元を離れてひとりで生活していくという課題に立ち向かわなくてはならないために孤独感を感じやすい。一般的な言葉の意味での孤独感は、「自分はひとりぼっちだという感覚。心の通じ合う人がなく寂しいという気持ち」となっている。この意味からすると、孤独感というのは、その人にとってマイナスな感情であることが分かる。しかし、その一方で、「青年が孤独を求めることは内省の機会を得て自分の生を自ら理解していく機会を得ることである（須田，1981）」や、「孤独は人に人間性を保持させ、広げさせ、深めさせる、人間たる経験である（Moustakas, 1961）」と、肯定的な評価もされている。このように青年期に孤独感を感じることは、決してマイナスな意味だけではなく、発達の観点から見ても大変重要である。したがって、人格形成上孤独を感じることは重要なことである。この孤独感を測定する尺度としては、落合（1983）による孤独感類型判別尺度 LSO（Loneliness Scale by Ochiai）が、よく知られている。落合（1991）は、孤独感を「自分ひとりであると感じること」と定義して、青年期の孤独感は、対自的次元（LSO-U、共感性）、対他的次元（LSO-E、個別性）の2次元軸に規定されるとして、その上でその組み合わせによって A 型、B 型、C 型、D 型の4つに

判別できるとしている。この4類型の特徴は、A型は他人との融合状態での孤独感であり、他者と分かり合える、理解出来ると思っているが人間の個別性には気付いていない、B型は人間同士では分かり合えない、理解出来ないと思っており、かつ個別性に気付いていないタイプである。C型は人間同士とは分かり合えない、理解出来ないと思いい、かつ個別性に気付いている。D型は人間同士では分かり合える、理解出来ると思いい、かつ個別性に気付いているタイプである。

次に、大学などの授業は、ゼミなどの少人数で行う授業が増える。大きな教室で大人数で行われる授業もあるが、ゼミ形式で個人個人が自らの考えを発表しなければならなかったり、自分以外の他人と意見交換したりすることも多くなっていく。そのようなあまり関わりの無かった他人に対して、何か行動を起こさなければならぬことが苦痛な人も多い。そして人前で焦ってしまい、どきどきして上手に話せなかったりする状況は、誰しもが経験し、心地の良いものでは無かったと考えられる。このように対人恐怖とは人見知りや汗が異常に出してしまう生理的の反応を伴う緊張や言葉がうまくつむげないなど言ったレベルのものから、神経症水準のより重篤なまで多岐にわたっている。しかし、対人恐怖は対人場面だけのものと考えられるが、そうではない。自分の顔が赤くなるのを恐れる「赤面恐怖」や他者の視線が気になる「視線恐怖」、自分の視線が他者に不快感を与えるのではないかと気にする「自己視線恐怖」、自分の表情がおかしいと思われているのではないかと気にしてしまう「表情恐怖」、自分が吃ってしまうことを恐れる「吃音恐怖」、人が見ているところで字を書く際に手が震えてしまう「書痙」、人のいるところでは排尿が出来ない「排尿困難恐怖」、人と同席の場面での食事に困難を覚える「会食恐怖」、自分から嫌な匂いが出て、周囲の人

に不快な思いをさせていると思ひ込む「自己臭恐怖」、自分の外見の醜さが他者に不快感を呼び起こしていると感じる「醜形恐怖」など様々な病態が存在する。岡野（1998）は、対人恐怖者が最も恐れる感情である「恥」と自己愛の関係に着目し、恥の代表的な感覚は羞恥と恥辱である。恥じらいやはにかみなども含まれる羞恥は、自分が他者の注目を浴びてしまうことで、自分が他者と異なることを突然意識してしまったときに起こる感情である。これは決してマイナスな側面だけではなく、自分が優れていると感じた場合でも羞恥の感情は抱くことがある。羞恥の場合は、それほど悩むことではない可能性もある。しかし恥辱の場合は、羞恥より深刻な場合が多い。自己価値の低下や自分自身に対する不甲斐なさ、自尊心の低下などが生起する。対人恐怖はこの恥辱の感情、感覚が本人を深刻に悩ましている状態であると、岡野は述べている。

しかし、これまでは初対面や他人に対して対人恐怖心性は検討されてきたが、近年の大学生は違った状態像を示すことが発表されている。山田ら（1987）は「ふれあい恐怖的心性」という症候群があることを指摘している。これは、初対面などのレベルの交友関係で発生するのではなく、顔見知りでそこからもう一段階上へと上がろうとする際に起こるとされている。ふれあい恐怖的心性の症状は、友人との食事や雑談などが困難であり、通常の形式的な作業などはそつなくこなせるとされている。これまで指摘されてきた対人恐怖心性は、初めて言葉を交わすことや目を見て話すこと、まず顔見知りの段階になることが困難である。その場合新しく人間関係を構成しなくなり、だんだんと人と疎遠になっていく。うまく人と話せない自分に憤りや恥を感じることで、対人恐怖状態に陥っていく。そのために、引きこもりや不登校などの問題に関わっていることが多かったと考えられる。その一方で、ふれあい恐怖的心性は最初の段階は何の苦も無くこなしてしまう。そのために表面上の友人を作ることは可能である。しかし、そこから友人関係を発展させていくことが非常に苦手なのである。自分と他人の2者間で自分が必ず何かをしなければならぬ状況に陥ることが苦手だと言える。

また対人恐怖心性に関連するものとして自己愛がある。自己愛について初めて論じたのはFreud（1914）であり、その後多くの精神分析学者が論じている。Freudは、単なる自己の身体各部分に対する性的愛着としての自体愛と、自己という統一的な身体表現に対する愛情としての自己愛を厳密に区別した（小此木，1985）。そして、Freudは自己愛を、自体愛から対象関係にいたる中間段階として位置づけた。自体愛とは、自己愛（性リビドーの自我自身への補給）の対象として全体的、統一的な自我が成立する以前の、自己の身体の部分のみが満足の源泉となる段階のことである。Freudは統合された自我が成立し、それが性欲動の対象となるにいたって初めて、自己愛が成立するとした。

青年期は誰しもが自己愛の特徴があらわれる時期である。しかし、自己愛の特徴があらわれる時期だからと言っても必ずしも自己愛性人格障害（アメリカ精神医学会，1994）に移行することを意味するわけではない。青年期の特徴として自意識が高まり、自分が他者の目からどう写っているのか、自分の言動はどれほどの人が聞いているのだろうか、自分のことを友人などはどう思っているのだろうかを、非常に気にするようになる。この場合、自分の優れた部分を出来るだけ他人に知ってほしいと考えている。このことから青年期の自意識の高まりというのは、自己愛的な願望のあらわれととらえることも出来る（上地・宮下，2004）。また孤独感のところでも述べたように親元から離れて生活を送ることで、己を構築していく重要な他者は、友人や仲間、恋人などに変化していく。そのような自分の両親とは違う他者に自分を認めてほしい、自分が有能であることを知ってほしい、注目されたいなどという欲求をもつことや、周囲に自分の有能さを認めさせようと行動し振る舞うことが、青年期の自己愛の特徴と言える。

小塩（2002）は、この自己愛について研究し、自己愛の傾向から青年期を分類した。自己愛傾向は全体的に高い者は、低い者に比べて対人恐怖傾向を示さず、攻撃的で個人志向的な特徴を示すとした。また、自己愛傾向が全体的に高い者の中で「注目・賞賛欲求」が優位なものは、対人恐怖的

で間接的な攻撃を行い、個人志向的で精神的に不健康を示す傾向にあるとした。その一方で、「自己主張性」が優位な者は対人恐怖傾向を示さず言語的な攻撃を行い、個人志向的で精神的に健康な者であると言えるとした。さらに友人関係と自己愛傾向について研究した小塩（1998）の研究では、広い友人関係をとる青年ほど自己愛傾向が高く、特に広くて浅い友人関係を構築しようとする青年は、「注目・賞賛欲求」因子での得点が高かった。反対に深い友人関係を構築している青年は、自己愛が低く自己評価も高いという結果を導いている。

目的

青年期の心理的特徴として、「孤独感」を感じやすいこと、そして「ふれあい恐怖的心性」や「自己愛傾向が強くなる」があげられる。岡田（1993）は、クラスター分析によって内省傾向が低くなおかつ対人恐怖的な心性が比較的低い群を抽出しており、この群を「ふれあい恐怖的心性」として取り扱っている。また清水・海塚（2002）の研究では、青年期における対人恐怖的心性を自己愛傾向との関連について検討している。その研究において、自己愛傾向も対人恐怖心性も低く、自己に対しての関心が低い群を、「ふれあい恐怖的心性」と類似した群として抽出している。このように対人恐怖という視点からふれあい恐怖的心性と自己愛の関連が述べられた研究はたくさん見られる。しかし、ふれあい恐怖的心性と自己愛傾向との関連について調査された研究は見当たらなかった。そして、孤独感も青年期の心理的特徴とされている。青年が感じる孤独感を規定する要因である対人的次元（人間の理解・共感性についての考え方の次元）と対自的次元（人間は人間の個性を自覚しているのかどうかの考え方の次元）の2つの要因に、「ふれあい恐怖的心性」と「自己愛傾向」がどのように関連するのかを本研究では検討したい。さらに本研究では孤独感をグループ分けし、そのグループ間では差が見られるのか、グループ間ではなく男女での差は見られるのかということに関しても検討することを目的とする。

仮説

仮説1 孤独感とふれあい恐怖的心性には関連がある。

ふれあい恐怖的心性には情緒的な場面を回避する傾向が考えられる。つまり、両親からの自立を考える青年にとって重要な他者の、他人である友人や仲間、恋人などである。ふれあい恐怖的心性の特徴として、新しく人間関係を構成しなくなり、だんだんと人と疎遠になっていく。うまく人と話せない自分に憤りや恥を感じることで対人恐怖的状态に陥っていく。そのために、引きこもりや不登校などの問題が起こったと考えられる。孤独感とは「自分はひとりであると感じる」こととして研究されてきた。そのために、ひとりであると感じている孤独感の高い人間は、人と深くふれあうことに関して恐怖を抱くのではないかと考える。そのため孤独感とふれあい恐怖的心性は関連があるのではないかと考え、仮説1とした。

仮説2 孤独感と自己愛傾向には、関連がない。

自己愛の特徴として個人の自意識が高まり、自分が他者の目からどう写っているのか、自分の言動はどれほどの人が聞いているのだろうか、自分のことを友人などはどう思っているのだろうかを非常に気にするようになる。この場合、自分の優れた部分を出来るだけ他人に知ってほしいと考えている。このことから、「青年期の自意識の強まり」というのは、自己愛的な願望のあらわれととらえることも出来る。そのため「自分はひとりである」と感じる孤独感と自己愛傾向は関連が低いのではないかと考え、仮説2とした。

仮説3 孤独感とふれあい恐怖的心性と自己愛については、男女の差がある。

大学には、さまざまな年代の人間がいる。男女比も各大学、各学部で大幅に違う場合が多い。そのため、小学校、中学校、高校など、男女比がおおよそ均等であり、半強制的に男女とも同じ空間で生活しなければならない環境よりも、大学生の場合授業の選択の仕方は個人個人で異なり、大幅に自由が与えられている。人間関係も自由に選択でき、誰を頼り誰とともに行動するか決定することが出来る。そのような状況ではやはり男性は男

性同士、女性は女性同士のグループを作りやすいのではないかとと思われる。そのために、女性と男性では孤独感やふれあい恐怖的心性、自己愛を感じるレベルも当然違ってくるので、男女の差があらわれるのではないかと考えて、仮説3とした。

仮説4 仮説3の孤独感やふれあい恐怖的心性心性については女性のほうが高い。

一般的にひとつのグループに集まって食事をしたり、行動をともしたりするのは女性同士のほうが多いと思われている。実際にグループの構成を観察しても、やはり女性の方がグループを作って行動していることが多い。そして女性はグループでいることで安心し、それを望んでいると考えられる。女性はどこかのグループに入っていなければ落ち着かず、グループから逸脱している自分を恐れる傾向がある。従って、表面上はたくさんの仲間たち、グループとうまく行動出来ていたとしても、ふれあい恐怖的心性を感じる経験は表面上の関係をうまく行うことができる女性の方が多いのではないかと考えて、仮説4とした。

方法

調査対象者 大学生（女子44人、男子56人、平均年齢20.77歳）

質問紙 回答者には基本的属性要因：年齢と性別について記入させた。

孤独感を測定する尺度として、落合（1983）が作成した孤独感類型判別尺度（16項目）を使用した。16の各項目について「はい」から「いいえ」の5段階で評定させた。ふれあい恐怖的心性的心性を測定する尺度として、岡田（2002）が作成した「ふれあい恐怖的心性尺度（17項目）」を使用した。17の各項目について「全くあてはまらない」から「とてもよく当てはまる」を5段階で評定をさせた。さらに自己愛の程度を測定するために、小塩（1998）が作成した「自己愛人格目録（30項目）」を使用した。30の各項目について「全く当てはまらない」から「とてもよく当てはまる」を5段階にして評定させた。

調査時期・形式 2013年10月から11月にかけて授業時間内に実施した。回答所要時間はおよそ20分であった。また、質問紙については無記名で記入させた。

結果

孤独感については、各得点はLSO-Uでは得点が高くなれば人間同士が共感・理解出来ると感じるように採点した。またLSO-Eでは、得点が高くなれば人間の個性を気付いているように採点した。すべて1点から5点で計算した。分析には、孤独感類型の分類は、落合（1983）に従って行った（表1）。そして、4類型を導き出した結果を表2に示した。またLSO-U、LSO-Eともに、どちらかが理論上の中央値である得点を取るものは、分類不能とし分析から除外した。また、今回の調査ではB型が女子0人、男子2人と非常に少なかった。女子のB型がないのもあり、今回は分析から除外した。そのため今回は100人の調査協力者の中から89人分で分析を行った。

表1 LSOによる類型分別（落合，1983）

LSO-U		LSO-E	
		人間の個性に気付いている 気付いていない (-14点~-1点)	気付いている （1点~14点）
人間同士は 理解共感で できると思 っている	できると思 っている （1点~18点）	A型	D型
	できないと 思っている （-18点~-1点）	B型	C型

表2 孤独感類型表

	類型					
性別	A	B	C	D	不能	総計
女	18	0	11	12	3	44
男	14	2	14	20	6	56
合計	32	2	25	32	9	100

ふれあい恐怖的心性については、先行研究に基づいて第1因子と第2因子の2つに絞った。第1因子は、「他人と仲良くなるのはうっとおしい」や「人と雑談するのは苦手だ」などの因子から成り立つ。第2因子は「人という場面で言葉がなくなって、しーんとしてしまわないかと不安になる」や「他人の本音で、自分が傷つけられそうな気がする」などの因子から成り立つ。これらの結果は、それぞれ岡田（2002）による「対人退却」因子と「関係調整不全」因子に類似している。そのためこれらを用いて、今回の研究の第1因子を「対人退却」

と、第2因子を「関係調整不全」と名づけた。

次に、自己愛傾向尺度について、先行研究に基づいて3つの因子に絞った。第1因子は「私は、周りの人たちに影響を与えるような才能を持っている」や「周りの人たちが自分のことを良い人間だと言ってくれているので、自分でもそうなんだと思う」などの因子から成り立つ。第2因子を「私はどんな時でも、周りを気にせず自分の好きなように振舞っている」や「周りの人が私のことを良く思ってくれないと、落ち着かない気分になる」などの因子から成り立つ。第3因子は「これまで私は自分の思い通りに生きてきたし、今後もそうしたいと思う」や「私は、どんなことにも挑戦していくほうだと思ふ」などの因子から成り立つ。これらの結果は、それぞれ小塩(1999)による「優越感・有能感」因子と「注目・賞賛欲求」、「自己主張」因子に類似している。そのためこれらを用いて、第1因子を「優越感・有能感」、第2因子を「注目・賞賛欲求」、第3因子を「自己主張」とした。2つの尺度ともに、回答で「全く当てはまらない」を1点、「あまり当てはまらない」を2点、「どちらでもない」を3点、「どちらかと言うと当てはまる」を4点、「とてもよくあてはまる」を5点として計算を行った。そして、信頼性を調べるために、各因子に対して α 係数を算出した。最初に、ふれあい恐怖的心性の第1因子「対人退却」の α 係数は、項目数が8で0.851であった。次に第2因子「関係調整不全」の α 係数は、項目数が5で0.651であった。自己愛傾向尺度の場合は、第1因子「優越感・有能感」の α 係数は、項目数が10で0.843であった。次に第2因子「注目・賞賛欲求」は、項目数が8で0.858であった。最後に第3因子「自己主張」の α 係数は、項目数が9で0.664であった。項目数が先行研究と違っているのは、 α 係数を算出する際に信頼性を低下させると考えられる項目であり、それらの項目を今回は除外することとなったからである。ふれあい恐怖的心性の尺度に関しても、自己愛傾向尺度の場合でも、項目をいくつか除外したことによって、信頼性が十分になった。

性別と孤独感について関連があるのかどうか分析するため、カイ二乗検定を行った。結果は、値が2.324、自由度が2、有意確率が0.313であった。

したがって今回の研究では関連が無かったと判断出来る。そのため、これ以降の分析には性別との関連を用いないこととした。そして、孤独感とふれあい恐怖的心性尺度、自己愛傾向尺度のグループ別の平均値と標準偏差を表3に示した。

表3 孤独感のグループ別平均値と標準偏差

	A (n = 32)		C (n = 25)		D (n = 32)	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
対人退却	2.258	0.586	3.410	0.977	2.430	0.746
関係調整不全	2.631	0.790	3.584	0.678	2.963	0.742
優越感・有能感	2.509	0.543	2.132	0.817	2.481	0.629
注目・賞賛欲求	2.910	0.803	2.570	0.896	2.980	0.874
自己主張	3.007	0.571	2.951	0.646	3.250	0.628

次に孤独感のグループ間でふれあい恐怖的心性や自己愛に差があるのかどうか、分散分析を用いて検討した。最初に、ふれあい恐怖的心性の分析では、ふれあい恐怖的心性の主効果は有意であった($F(1,86) = 19.358, p < .001$)。ふれあい恐怖的心性と孤独感についての交互作用は有意であった($F(2,86) = 19.385, p < .001$)。次に自己愛の分析では、自己愛の主効果は有意であった($F(2,172) = 36.678, p < .001$)。自己愛と孤独感についての交互作用は有意ではなかった($F(2,86) = 2.878, p < n.s$)。

考察

今回の調査結果では、孤独感の分類であるA型は女性が18人、男性が14人、合計32人であった。C型は女性が11人、男性が14人、合計25人であった。D型は女性が12人、男性が20人、合計32人であった。これらからD型が全体的に多いことがわかる。D型はLSO-U、LSO-Eともに高い値を出した場合の分類である。現実にかかわっている人間と理解・共感することが出来ると考え、それに加えて、人間の個別性にも気づいている。そして次に多いのが、A型である。A型は現実に関わっている人間と理解や共感出来る気づいているが、人間は個別であることには気づいていない状態である。青年期においては、親密な人間関係を築いた後、親密であるがゆえに自分と他の人間は違うものであることに気づくようになると考えられている。ただ仲の良い親密な友

青年期における孤独感とふれあい恐怖的心性・自己愛傾向との関係について

人のままでいるだけではなく、そこから自分という存在を認めていくことが、青年期の孤独感を感じることで人間が成長する材料となり、自覚し変化していくことで成熟した人間になる糧となるのである。そして、この青年期の孤独感を体験することで人間は成人期、壮年期へと移行していくことが出来るようになる。この感情を持ち成熟することで、就職などの新しい環境に入っても、他人を理解し共感することが出来るようになる。そして理解や共感しつつも、自分の感情や考えとは違う人間がいることをきちんと理解しているがゆえに、それを伝えようと自らを理解してもらえようように努力出来るのではないかと考える。青年期では、孤独感を感じる事が決してマイナスなことではなく、孤独感を感じる事によってより自分が成熟した人間になる準備をすることが出来るのである。そのために、孤独感を感じることは人間の成長に関して言えば非常に重要なことである。

今回の調査では、A型、そしてD型の人が多かったが、C型もA型やD型と少し少ないが存在している。C型の人には現実に関わっている自分以外の人間とは理解や共感出来ないと考えているが、人間の個性には気づいている状態である。C型が存在することに関して考察すると、自分とは違う人間がいることに気づいている点では自分自身と他者の存在をきちんと認識し、共存出来ているのではないかと考える。しかし、その人間のことは理解や共感できないと考えている。それは、自分の意見や考えが人と違ってはいることは分かっているのだが、なぜ自分の意見や考えを他人は理解できないのかが、自分には理解出来ないからだろう。そう考えると、自分のことを理解してくれていない他人が言う意見などを共感できるはずがない。このように、自分以外の存在のみを感じているだけで、まだその存在を認められていないということで、今回C型の人数も多かったのではないかと考える。

次に性別と孤独感の関連がなかった結果について、今まで一般的に知られていた女性のグループ、男性のグループという概念が昔より薄まってきたのではないかと考える。今回は大学内で調査を行ったのだが、一般的に知られていた女性ごとのグループは、今より大学の進学率もあまり高

くない時期、そしてその高くない進学率の中での女性の割合は少なかった時期の現象ではないかと考えられる。そのような女性が圧倒的に少ない現場であるとする、女性同士で固まってグループ化してしまうのも納得できる。しかし現在は進学率も上昇し、女性の進学率も大幅に増えたと考えられる。そのような環境の変化の中で女性の立場は昔とは違ってきているのだらうと思われる。男性と女性の割合の双方が50パーセントに近づくことで、無理に一緒にいなければ必然的にひとりであった以前の状況と比べて、女性だけのグループ、男性だけのグループというのは少なくなってきているのではないだろうか。実際に大学内を見渡してみると、女性だけのグループも確かに存在する。しかし、男女混合のグループも増えてきていると実感することが多々ある。孤独感とふれあい恐怖的心性、自己愛傾向に男女間に有意がみられなかったという結果は、孤独感とふれあい恐怖的心性、自己愛傾向に性差は無く、青年期という特定の期間に出現する状態像である。そのため、今回は男女の要因が孤独感とは関連が無いという結果が出たのではないかと考える。従って仮説3と仮説4は立証されなかった。

それから孤独感とふれあい恐怖的心性、自己愛傾向の関連についてであるが、孤独感とふれあい恐怖的心性の値から見ると、A型の対人退却のみが少し低いが、A型、C型、D型とも比較的高いのではないかと考えられる。次に、孤独感と自己愛傾向に関しては、こちらはC型の「優越感・有能感」が若干低いがこれも比較的高く、ふれあい恐怖的心性と自己愛傾向の平均値に関しては差がないように見える。しかし孤独感のグループ間でふれあい恐怖的心性や自己愛に差が出来ているのかを見るために分散分析を行ったところ、ふれあい恐怖的心性の分析では、ふれあい恐怖的心性の主効果は有意であった ($F(1,86) = 19.358, p < .001$)。そして、ふれあい恐怖的心性と孤独感についての交互作用は有意であった ($F(2,86) = 19.385, p < .001$)。次に自己愛の分析では、自己愛の主効果は有意であった ($F(2,172) = 36.678, p < .001$)。しかし自己愛と孤独感についての交互作用は有意ではなかった ($F(2,86) = 2.878, p < n.s$)。この結果をもとに考察すると、孤独感

とふれあい恐怖的心性には関連があるが、孤独感と自己愛には関連がないことが分かった。やはり仮説1で定義したように、ふれあい恐怖的心性には情緒的な場面を回避する傾向が考えられる。つまり両親からの自立を考える青年にとって、他人である友人や仲間、恋人などの重要な他者となる。ふれあい恐怖的心性の特徴として、新しく人間関係を構成しなくなり、だんだんと人と疎遠になっていく。うまく人と話せない自分に憤りや恥を感じることで対人恐怖的な状態に陥っていく。そのために、引きこもりや不登校などの問題に関わっていることも多かったと考えられる。そのため孤独感は「自分はひとりであると感じる」ことを定義として調査されてきた。そのためひとりであると感じている孤独感の高い人間は、人と深くふれあうことに関して恐怖を抱き、その結果、ひとりだと感じるようになるのではないかと考える。本研究では、孤独感とふれあい恐怖的心性は関連があるのではないかと考えた。今回大学生に調査を依頼した時期が10月から11月であり、1回生であっても4月に入学し6か月も時間が経てばある程度の友人関係は構築できていると考えられる。ふれあい恐怖的心性の特徴である2者間、1人对1人の深く親密な友人関係を築くことが苦手で顔見知りの存在となっても、それからの関係の発展が出来ず、疎遠になり多くの人間に対し広く浅くの関係を取る人が多いからこそ、孤独感とふれあい恐怖的心性に交互作用が認められる結果となっているのではないかと考える。

次に、孤独感と自己愛傾向については、仮説2で定義したように、孤独感と自己愛傾向には、関連がないと考えていた。青年期の自己愛傾向の特徴として、個人の自意識が高まり、自分が他者の目からどう写っているのか、自分の言動はどれほどの人が聞いているのだろうか、自分のことを友人はどう思っているのだろうかを非常に気にするようになる。この場合、自分の優れた部分を出来るだけ他人に知ってほしいと考えている。この場合の他人というのは、青年期になり親元から離れることで、自分の両親とは違う他者のことであり、そうした友人たちに自分を認めてほしい、自分が有能であることを知ってほしい、注目されたいなどという欲求をもつことや、周囲に自分の有能さ

を認めさせようと行動したり振る舞ったりすることが青年期の自己愛の特徴である。そこから、「自分はひとりである」と感じる孤独感とは関連が低いのではないかと考えた。やはり孤独感の定義が「自分はひとりであると感じる」ということが重要であり、自己愛傾向の人間は他人に自分という存在を認めてもらえるのかどうか重要であり、それによって「自分はひとりである」と感じるのは難しいのではないかと考える。

以上のように、今回の研究テーマである孤独感とふれあい恐怖的心性の関連、孤独感と自己愛傾向の関連について研究した。ふれあい恐怖が青年期特有の症状であることを提示されたのが10年以上前のことである。そのために、この10年間に青年期の人間の考え方や環境などは大きく変わっているのではないかと考えられる。大学に進学する人数も10年前より倍になっている。そのためにより現代の青年を対象とした調査が、今後も求められる。青年期の発達課題についてエリクソンは、この時期に対応する2つの心理的側面は「同一性」と、それと対の関係をなす「同一性拡散」と述べている。青年期の始まりは第二次性徴とも重なり、男性なら男性らしい、女性なら女性らしい肉体にはっきり変化していく時期となる。そのために、この時期は、自分は他人の目にどう映っているのか、あるいは他人からどう思われているのかが気になりやすく、自己の存在をはっきり意識し始める時期である。このような青年期の発達課題の特徴と孤独感やふれあい恐怖、自己愛の特徴は類似しているために、青年期の人たちのみではなく、幅広い年齢層で調査することにより、より詳細な孤独感とふれあい恐怖的心性、自己愛傾向の関連について検討する必要があると考える。

謝辞

この研究を卒業論文として形にすることが出来ましたのは、担当して頂いた久保克彦教授の熱心なご指導や、赤間健一講師のご指導、そして調査の際に協力して下さった同期や後輩の皆様のおかげです。協力していただいた皆様へ心から感謝の気持ちと御礼を申し上げます、謝辞にかえさせていただきます。

参考・引用文献

- Freud, S. 懸田克躬・吉村博次(訳)(1969) ナルシズム入門 フロイト著作集5 性欲論・病 例 研 究 人 文 書 院 (Freud, S. 1914 On narcissism: An introduction)
- Moustakas, C. E. (1961): Loneliness. Prentice-Hall. 飯田和子訳(1997): 孤独. 岩崎学術出版社
- アメリカ精神医学会(1994) 精神障害の診断・統計マニュアル 第4版 (Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders)
- 岡田努 (1993) 現代の大学生における「内省および友人関係のあり方」と「対人恐怖的心性」との関連 発達心理学研究 第4巻 第2号
- 岡田努 (1999) 現代青年に特有な友人関係の取り方と自己愛傾向の関連について 立教大学教職研究 9
- 岡田努 (2002) 現代の大学生の「ふれ合い恐怖的心性」と友人関係の関連について考察 性格心理学研究 第10巻 第2号
- 岡野憲一郎 (1998) 恥と自己愛の精神分析—対人恐怖から差別論まで— 岩崎学術出版社
- 小此木啓吾 (1981) 自己愛人間—現代ナルシズム論— 朝日出版社
- 小此木啓吾 (1985) 現代精神分析の基礎理論 弘文堂
- 小塩真司 (2002) 自己愛傾向によって青年を分類する試み 教育心理学研究 50
- 小塩真司 (2004) 自己愛の青年心理学 ナカニシヤ出版
- 上地雄一郎・宮下一 (2004) もろい青少年の心 北大路書房
- 落合良行 (1983) 孤独感の類型判別尺度 (LSO) の作成 教育心理学研究, 31
- 落合良行 (1999) 孤独な心—寂しい孤独感から明るい孤独感へ. サイエンス社
- 須田 治 (1981) 思春期と孤独 詫摩武俊編, 思春期の悩み. 福村出版
- 清水健司・海塚敏郎 (2002) 青年期における対人恐怖心性と自己愛傾向の関連 教育心理学研究 50
- 山田和夫 (1992) ふれあい恐怖 芸文社
- 山田和夫・安東恵美子・宮川京子・奥田良子 (1987) 問題のある未熟な学生の親子関係から研究 (第2報): ふれあい恐怖 (会食恐怖) の本質と家族研究 安田生命社会事業団研究助成論文集, 23 (2)

資料

大学生の意識調査

このアンケートは、皆さんの対人関係に関する意識を調査するものです。結果は全て統計的に処理されますので、個人がどのように回答を行ったかについて問題にしたり、公表したりすることはありません。各項目について出来るだけ正確に回答してください。

<記入についてのお願い>

- ・ご回答にあたっては、他の方とご相談されることなく必ずお一人でお答えください。
- ・ご回答が終わったら、回答欄に記入漏れがないかもう一度ご確認ください。

京都学園大学 人間文化学部心理学科 久保ゼミ
永井しおり

まず以下の質問にお答え下さい。

性別 … 男 ・ 女

年齢 () 歳

以下の質問に対して、あなたにあてはまる所に○をつけて回答してください。

- | 1… いいえ | いいえ | どちらかというといいえ | どちらともいえない | どちらかというとはい | はい |
|------------------------------------|-----|-------------|-----------|------------|----|
| 2… どちらかというといいえ | | | | | |
| 3… どちらともいえない | | | | | |
| 4… どちらかというとはい | | | | | |
| 5… はい | | | | | |
| 1. 私のことに親身に相談相手になってくれる人はいないと思う。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 2. 人間は、他人の喜びや悩みと一緒に味わうことができると思う。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 3. 私のことをまわりの人は理解してくれると信じている。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 4. 私は、私の生き方を誰かが理解してくれると信じている。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 5. 結局自分はひとりではかかないと思う。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 6. 私の考えや感じを何人かの人はわかってくれると思う。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 7. 私の考えや感じを誰もわかってくれないと思う。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 8. 自分の問題は、最後は、自分で解決しなくてはならないのだと思う。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 9. 人間は、本来、ひとりぼっちなのだと思う。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 10. 私の生き方を誰もわかってくれはしないとと思う。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |

青年期における孤独感とふれあい恐怖の心性・自己愛傾向との関係について

11. 結局、人間は、ひとりで生きるように運命づけられていると思う。	1	2	3	4	5
12. 私とまったく同じ考えや感じを持っている人が、必ずどこかにいると思う。	1	2	3	4	5
13. 私の人生と同じ人生は、過去にも未来にもないと思う。	1	2	3	4	5
14. 誰も私をわかってくれないと、私は感じている。	1	2	3	4	5
15. 人間は、互いに相手の気持ちをわかりあえると思う。	1	2	3	4	5
16. どんなに親しい人も、結局、自分とは別個の人間だと思う。	1	2	3	4	5

選択肢の中から、普段のあなたに最も近いと思う番号に○をつけて回答してください。

	全く当てはまらない…1	あまり当てはまらない…2	どちらともいえない…3	どちらかという当てはまる…4	とてもよく当てはまる…5	いいえ	どちらかというといえ	どちらともいえない	どちらかというとはい	はい
1. 友達と二人きりでいる場面は苦手だ	1	2	3	4	5					
2. できれば食事は一人でもりたい	1	2	3	4	5					
3. 人と雑談するのは苦手だ	1	2	3	4	5					
4. 昼食は友達と食べるのが好きである	1	2	3	4	5					
5. 友人数人でいる場面は苦手だ	1	2	3	4	5					
6. 友達と一緒にいるよりも一人でいるほうが気が楽だ	1	2	3	4	5					
7. 人間と関わるよりも物と付き合っているほうが楽だ	1	2	3	4	5					
8. 人という場面で言葉が無くなってしーんとしてしまわないか不安になる	1	2	3	4	5					
9. 友達と一緒に食事をするのは好きではない	1	2	3	4	5					
10. 他人の本音で、自分が傷つけられそうな気がする	1	2	3	4	5					
11. 他人とちょうど良い距離をとるのが難しい	1	2	3	4	5					
12. 人といっても話題がなくて困ることが多い	1	2	3	4	5					
13. 一人で趣味に没頭していたい	1	2	3	4	5					
14. 大勢の友達とワイワイ騒ぐのが好きだ	1	2	3	4	5					
15. ほかの人には自分を受け入れてくれない	1	2	3	4	5					
16. 他人と親しくなるのはうっとおしい	1	2	3	4	5					
17. できることなら人とあまり関わりになりたくない	1	2	3	4	5					
18. 私は才能に恵まれた人間であると思う。	1	2	3	4	5					
19. 私は自分の意見をはっきりいう人間だと思う	1	2	3	4	5					
20. 私は、周りの人たちより優れた才能を持っていると思う	1	2	3	4	5					
21. 私はみんなから褒められたいと思っている	1	2	3	4	5					
22. 私は控えめな人間とは正反対の人間だと思う	1	2	3	4	5					
23. 私は周りの人たちより有能な人間であると思う	1	2	3	4	5					
24. 私はどちらかといえば注目される人間になりたい	1	2	3	4	5					

- | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 25. 私はどんな時でも周りを気にせず自分の好きなように振るまっている | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 26. 私は周りの人間が学ぶだけの値打がある長所を持っている | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 27. 周りの人が私のことを良く思ってくれないと、落ち着かない気分になる | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 28. 私は自分で責任を持って決断するのが好きだ | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 29. 周りの人たちは私の才能を認めてくれる | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 30. 私は多くの人から尊敬される人間になりたい | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 31. 私はどんなことにも挑戦していくほうだと思う | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 32. 私は周りの人に影響を与えることができるような才能を持っている | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 33. 私は人々を従わせられるような偉い人間になりたい | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 34. これまで私は自分の思い通りに生きてきたし、今後もそうしたいと思う | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 35. 私が言えばどんなことでもみんな信用してくれる | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 36. 機会があれば私は人目につくことを進んでやりたい | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 37. いつも私は話しているうちに話の中心になってしまう | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 38. 私に接する人はみんな私という人間を気に入ってくれているようだ | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 39. 私はみんなの人気者になりたいと思っている | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 40. 私は自己主張が強いほうだと思う | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 41. 私はどんなことでも上手くこなせる人間だと思う | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 42. 私は人々の話題になるような人間になりたい | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 43. 私は自分独自のやり方を通す方だ | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 44. 周りの人たちが自分のことを良い人間だと言ってくれるので自分でもそうなんだと思う | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 45. 人が私に注意を向けてくれないと、落ち着かない気分になる | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 46. 私は個性の強い人間だと思う | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |

ご協力ありがとうございました。

記入漏れが無いか確認した後に提出をお願いします。